

大学生の SNS 利用が対人関係に与えるポジティブな影響 —自己効力・友人関係満足度を用いて—

川上 桃香

平成 28 年版情報通信白書において、20 代のインターネット利用の目的・用途では“ソーシャルネットワークワーキングサービスの利用”が約 70%である。また、SNS の利用目的では“従来からの知人とのコミュニケーションのため”が約 90%と最も多かった。SNS が普及していく中で、SNS 疲れや孤独感といった SNS のネガティブな側面の研究は進められてきたがポジティブな側面を扱った研究は少ない。本研究では、ポジティブな側面として自己効力と友人関係満足度を用い、代表的なソーシャルネットワークワーキングサービス（Social Networking Service、SNS）として Facebook と Twitter と取り上げ、SNS 使用状況と自己効力・友人関係満足度との間にどのような関係が存在するのかを究明する。

2016 年 4 月から 5 月にかけて、質問紙調査を行った。大学生を研究対象とし筑波大学・東京工業大学の学部生に対して調査を行った。調査票では、調査協力者の基本属性・SNS 使用状況・自己効力・友人関係満足度について尋ねた。自己効力では曾我部ら（2010）が作成した、「社会心理的自己効力意識」尺度を用いた。友人関係満足度では岩崎（2015）が作成した友人関係感情尺度を用いた。

SNS 使用状況を、「Facebook と Twitter の併用」、「Facebook のみ」、「Twitter のみ」、「アカウントなし」で分類した。「Facebook のみ」は 2 人（全体の 0.9%）であったため、分析から除外した。社会心理的自己効力意識を従属変数、SNS 使用状況を要因とする一元配置分散分析を行った結果、有意差がみられた。Bonferroni 法で多重比較を行ったところ、「Twitter のみ」と「Facebook と Twitter の併用」、「Twitter のみ」と「アカウントなし」に有意差がみられた（ $p < .05$ ）。友人関係満足度を従属変数、SNS 使用状況を要因とする一元配置分散分析を行った結果、有意差はみられなかった。社会心理的自己効力意識、友人関係満足度を従属変数、SNS 閲覧頻度、投稿頻度を要因とした一元配置分散分析では有意差はみられなかった。社会心理的自己効力意識、友人関係満足度を従属変数、Facebook プロフィールの閲覧制限有無を要因とした t 検定の結果、有意差がみられた。

社会心理的自己効力意識の平均値が最も高かったのが「アカウントなし」であり、次に「Facebook と Twitter の併用」、最後に「Twitter のみ」であった。現実の対人関係を反映しながら使用することが推奨されている SNS を使用しているほうが自己効力が高いと言える。友人関係満足度で有意差がみられなかったのは、現実の友人関係とインターネット上の友人関係それぞれでの友人関係満足度を測定しなかったためだと考えられる。男性は Facebook プロフィールの閲覧制限なし、女性は閲覧制限ありのほうが社会心理的自己効力意識、友人関係満足度が高いという特徴がみられた。この特徴は、SNS に男性は交流の広がり求め、女性は既存の関係の強化を望んでいることによって現れたものだと考える。

（指導教員 叶少瑜）